《特選》

みんなが笑顔ですごすには

稲枝東小学校　六年
髙尾（たかお）　実鈴（みすず）　さん

私には三歳下に妹がいます。その妹が生まれてしばらく経ったある日、聴覚障害が発覚しました。私はその記憶はほとんど残っていないので思い出せないけれど、決して残念なんて思いはありませんでした。妹は少し成長して幼稚園に行く年齢になりました。この頃は、ろう学校に通っていました。私はこのような場所を知って、妹が同じ障害を持つ友達と楽しく協力して学んでいる姿を見ると嬉しくなって「手話を覚えたい」という気持ちが大きくなりました。母はずっと前から手話サークルという場所に通っていて、障害を持つ友達がいたので私も手話を教えてもらっていました。私も手話を使って簡単な会話ができるようになり、妹の友だちやろう学校の先生と話すことができるようになって、とても嬉しかったです。妹が家で言葉の練習をしていて、言えるようになった時はみんなで喜びました。ろう学校に通う期間はあっという間にすぎて、妹はもう小学生になる年齢になりました。そのころ家族は、妹が入学する学校を私が通っている稲枝東小学校にするか、聴覚障害者の子供たちが通う小学校にするかすごくまよっていました。そんな時、私の母が稲枝東小学校と相談すると、その子に合った勉強の仕方ができる教室があると分かり、妹は安心して小学校に入学することができました。その後も母は一生懸命人工内耳や手話について説明したり、動画を同学年の人に見せたりと、妹がみんなと同じようにすごせるように努力しました。全校集会の時や、インタビューの時などにロジャーと呼ばれる人工内耳に直接声が届く機械をみんなにまわしてつけてもらったり妹の耳の近くで話してくれたりしているのを見たりすると、すごく嬉しくなります。また、障害について授業で習ったり教科書に手話がのっていたりすると、みんなもすすんで調べたりやってみたりすることができると思います。耳がきこえる私でも、手話を覚えてくれた友だちや母などと、はなれていて声が届かない時にも使えてすごく便利なものです。だから、私たちが手話に少しでも興味をもって、少しの単語やあいさつの手話をまず「やってみよう」と思うことで聴覚障害者の人と簡単な会話ができ、話せたことでお互いに「覚えてよかったな」「覚えてくれたんだ」と、話せて嬉しいなという気持ちがわいてくると思います。私はいつもみんなと仲良く、自分が生活しやすいように考えて努力している妹が大好きで、誇りに思っています。少しでも聴覚障害者の人の支えになるように、みなさんも手話を覚えてみませんか。

《選評》

この作品からは、障害者と健常者を隔てる障壁というものを感じることはありません。現在、障害の社会モデルという考え方が広まってきています。それは、障害を障害者個人の特性ではなく、おもに社会によって作られたものとみなすものです。障害者の生活に不自由があれば、合理的配慮や支援によって障壁を作らない、そのことを具体的な事例で示しているすばらしい作品であると思います。（武部　康広）